

氏名	金 景 賢 (キム キョウマン)		
学位の種類	博 士 (芸 術)		
学位記番号	甲第 18 号		
学位授与日	平成 20 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論文題目	金属彫刻における稜線の分析		
審査委員	主査 教 授	本 江 邦 夫	
	副査 教 授	諸 川 春 樹	
	副査 教 授	竹 田 光 幸	
	副査 練馬区立美術館 副館長	横 山 勝 彦	

## 内 容 の 要 旨

木や石などの素材は三次元として重量感と塊を持っていることが感じられ、塊の中は詰まっている。しかし金属の板の場合は二次元の面で認識され、板から五枚の面を溶接の技術でくっつけていくと三次元の立体になり、形の中は空である。形の中が空であるということはその中に空間が存在しているということと同じではないか。そうすると木や石のような素材で作られた作品と、金属で作られた作品のボリュームの表現は同じであるが、空間の表現に関しては違う意味が潜んでいるのではないかと考えるようになり、彫刻作品のボリュームについて興味を持ち始めた。

私はこのような彫刻の形の輪郭と稜線が違う意味を持っているのではないかと考えた。輪郭は線に関する表現で使うけれど、稜線は三次元に対する面の表現でしか使えない。つまり、二次元の平面では輪郭という表現はできるけれど、稜線という言葉は使えないのだ。三次元の立体は空間と共に存在するため、稜線という言葉は輪郭とは違う意味がある。そこで本論では立体の彫刻における稜線はどんな意味を持ち、彫刻とどのような関係があるのかを考察する。

この研究には、三次元の立体としての、彫刻作品の稜線の存在、作品の正面性よりも全体的な調和のとれた造形性の表現の可能性、素材によって発見された空間の変化の三つの意図がある。

このような意図により、第 I 章の自作の表現意図と方法では、私が彫刻を始めたときから現在までの作品の空間に関する考えと制作表現方法、また鉄の素材を選んだ動機から、ステンレススチールを使い始めたことなどを述べる。

第 II 章の金属彫刻では、彫刻の概念と金属彫刻の登場に分けて論じる。その中にも特に鉄を素材に選び、溶接技術が開発されたことにより始まった金属彫刻の出発点より、ステンレス

ティールが彫刻の素材で選ばれ始めたことを中心にして述べる。

第Ⅲ章の稜線では、稜線の哲学的概念と視覚的な概念、素材によってかわってくる稜線の変化について分けて論じる。哲学概念としては金属彫刻の作品の稜線は空間と関係があり、その空間は形が持つ空間だけではなく、形の中の空間も存在するということにより、なぜこの空間が重要なのかについて述べている。また、視覚的には目に見える空間と目に見えない空間が存在している。そこで稜線と空間との関係によって目に見えない空間の重要性を論じる。そして、ステンレススチールの鏡面の部分で形が消えてしまうことによって稜線も変化してくることを、接続稜線と非接続稜線とに分けて述べる。

第Ⅳ章の稜線における黄金分割では、稜線を基礎とした向きと長さの定義、また黄金分割と関係すること、またその変化について興味深く述べている。それから、正面性の概念と全体的な調和のとれた造形性の表現の可能性を黄金分割と関連させて述べる。さらにこのような黄金分割を作品に取り入れた作家について例をあげながら簡単に述べる。

第Ⅴ章の作品の分析では、自作「大地の気運」、「キリンの思い出」、「飛翔」の三つに分けて、テーマで選んだ動機や表現方法などについて論じる。また、作品の鑑賞位置を何箇所か決め、黄金分割の考えから作品の稜線を分析する。

私にとって稜線というのは、哲学的、視覚的な意味を持ち、空間の内部と外部の境界線になるものである。これは作られた形の中に空間が存在しているという立場から見た意味づけである。

また、形態の稜線には長さと言きが存在し、それらは、人間の視覚を通して目に入ると同時に空間も感じさせる。このように空間と稜線の長さと言きの変化について研究する過程の中で、私は造形性こそが最も基本的な要素だと認識してきた。しかし、現代の彫刻にとっては造形性が重要な視点ではないかもしれない。とはいえ、立体と言ったり彫刻と言ったりするあいまいな概念の混乱の中では、やはり作家自身が自分の論理を持たなければならないと思う。彫刻の形態が単純であるか、複雑であるかに関係なく、彫刻家には造形美の基本的な知識が必要であることはいうまでもない。

さて私は作品の稜線の長さと言きについての分析に黄金分割を基本としたことは間違いのないと思っている。黄金分割に関する文献が大量に現れると同時に、自然界や建築などにその概念はいつそう広く見られるようになった。また、現代までの芸術作品をみると黄金分割の着想を取り上げたものも少なくない。これは芸術家が美しいと言われてきた黄金分割について関心をもっていたということである。このように作品に完全な比例、対比の法則を設定する努力は長い間続き、美しいすべての比例の基礎になる幾何学的な比例を発見する努力はこれからも続けていくべきだろう。

最後に美術において金属彫刻、特にステンレススチール彫刻について制作表現や意図などの無限な表現の可能性をすこしずつ発展させていくことが私自身の今後の課題であると考えている。